



# 統合失調症を患う母とともに生きる子ども

## ～ゆりの日常～

スクランブルエッグ —15歳—



### 松岡園子

台所の入り口から全体を見まわして、2年前の自分から、中3になり3か月後に卒業を控えている今の自分が想像できただろうかとゆりは考えていた。中1の時に祖母が亡くなり、母・夏子とふたり暮らしになった頃、急に夏子が独り言を話した。神戸にある自宅で英語教室をひらき、たくさんの生徒に英語を教え、いきいきとしていた夏子はどこかへ行ってしまった。意思の疎通を図ることができず、自分の身の回りのことさえできなくなってしまった夏子とゆりが2人で暮らすことに、周囲は反対した。親戚は、ゆりを児童養護施設へ、夏子を病院へ入院させる手はずを整えていた。児童養護施設へ入所したゆりは、そこで暮らすことに納得がいかず、夏子と暮らしたい一心で施設を何度か抜け出した。そして話し合いの末、夏子と2人で神戸の家へ戻ってきた。そのことで親戚を激怒させ疎遠になってしまったが、夏子と一緒に暮らすことは、譲ることのできない希望だった。生活面では大変なことの連続だったが、友達やその家族、近所の人達に助けられ、どうにかここまで来ることができた。夏子が入院し、しばらく1人で暮らしたこともある。退院してきた夏子は寝ていることが多かったが、2年の時間が過ぎていく間に独り言が減り、話の通じる時間が増えてきた。中2の1月に阪神・淡路大震災が起き、神戸の街だけでなく人々の気持ちが大きく揺さぶられるのを目の当たりにした。何を大切に生きていくのか、その問いに向き合わざるを得なくなった。そして中3になった。ゆりは卒業後の進路希望は就職にして、夜に定時制高校へ通うという道を選択した。

「できたよ。食べる？」

夏子の声と焼きそばソースの匂いがした。最近、「作業所」に通い始めた夏子は、そこでお弁当を作って配達しているようだった。料理のしかたもそこで教えてもらえるようで、本を見ながら夕飯のおかずを作ってくれる日が増えてきた。

「うーん、もう少し後で」

中学校から帰ってきて制服のままのゆりは一旦そう言ったが、着替えるのは後にしよう

と思い直した。食事の用意を自分がしてきた時のことを思うと、作ってもらってすぐに食べないのは、なんだか悪いような気がした。

食事中の会話は無い。

「今日、どんなことしたん？」

沈黙に耐えかねて、ゆりが口を開いた。

「ん、お弁当作りと……来月のカレンダーも作ったよ」

質問をすれば、応えてくれる。

「そうなんや。お弁当作るの、慣れた？」

「うーん、早くできなくて怒られることもあるよ」

夏子の顔が一瞬、曇った。

「そっかあ。でも最近、お母ちゃん楽しそう」

また沈黙に戻る。ゆりは、祖父や祖母が生きている頃の食事場面を思い出した。その日あったことや、おかずに入っている食材の話など、何かを話しながら食べていた覚えがあった。なんで、何も話さないんやろう。

「お薬、飲んだ？」

夏子が食べ終わったのを空いたお皿で確認すると、ゆりはすかさず訊ねる。

「飲んだよ」

薬を飲むのを飛ばしてしまうと、しんどくなって寝込むということが少しずつ分かってきた。うっかり忘れてしまうこともあるから、声をかけるようにしている。台所の戸棚の中で分厚い薬袋が2束、輪ゴムで留められているのが見える。その分厚さが、気安く触ってはいけないもののように感じさせた。



阪神・淡路大震災から1年が経ち、神戸の街の中で新しく生まれ変わった場所、やっと動きだした場所、時間が止まったままの場所が混在している。先月の17日には、震災の追悼行事が行われたところだ。

「あと1か月かあ」

ゆりは声を細く高く空に向かって投げかけた。中学校からの帰り道、粉雪が降り始めていた。

「なんか、そう思うと寂しいなあ。ゆりちゃん、4月から忙しくなると思うけど、卒業しても遊ばなっ」

林さんがそう言ってくれて嬉しい。でも、4月からの生活を思うと胸の高鳴りを抑えるのが難しくなった。早く働きたい。こういう時は、寂しがった方が良いのだろうか。

「うん、まずは仕事に慣れんとなっ」

そう答えながらもゆりは、卒業式までの日数をカレンダーにつけていた。あと1か月も

ないよ。学校に行くのはあと 20 回ほどだ。

クラスの中は公立高校の入試を控えている緊張感と、もう進路が決まった脱力感が入り混じり、上澄みの部分だけでつくり上げたような空気が渦巻いている。私はもうすぐ「社会人」なんだ。働くことができるんだ。ゆりの胸はそう考えるだけで広く、温かくなった。

1 月に行く、2 月は逃げる、3 月は去る。年が明けると祖父が毎日のように言っていた言葉通り、待ち焦がれていた卒業式はあっという間に来て、あっという間に終わった。学校の門を出たところにある公園では、先生や友達同士の挨拶、写真撮影で歓声が上がっていた。「卒業」や「新しい生活」への高揚感を感じるのだが、ゆりと林さんはそうした記念を残すことへの興味があまりない。だからタイミングを見て、すぐに抜けて帰ってきた。ゆりは林さんとはそういったところでも気が合うと感じていた。

卒業式を終えて家に帰ってきたゆりがポストを覗くと、1 枚の封筒が入っていた。宛名には『吉田ゆり様』とある。4 月 1 日に開かれる入社式の案内だった。4 月 1 日、昼間の高校生になる同級生の皆はまだ春休み中だ。『会場』の欄には、ホテルの名前が書かれていた。下に書かれた住所を見ると、神戸の海沿いにあるホテルのようだった。早く働きたい。そう思っているゆりには、案内の手紙が今までとは違う世界への招待状のように感じられた。



卒業式の日が届いた案内状を手にしながらゆりは、会場として指定されたホテルに着いた。『こうべ給食 入社式会場』という張り紙がされた部屋のドアを開けると、テーブルを挟んで一番奥の席に女性が腰かけており、ゆりと目が合った。60 代ぐらいのその女性は、面接をしてくれた社長だった。紫色のワンピースの首元には、サーモンピンク色の真珠が光っている。その女性の横には 40 代ぐらいの男性、20 代ぐらいの女性が何も話さず、お互いにまっすぐ前を向いて座っている。

「あの、吉田ゆりといいます。入社式に来ました」

「吉田さんね。お待ちしていましたよ、どうぞ。こちらは専務を務めている息子です」

社長はそう言って、横に座っている男性を手のひらで紹介した。社長の柔らかい表情や声に触れると、固くなっていた気持ちがほどけていくのがわかった。

「よろしくおねがいします」

ゆりが腰かけると同時ぐらいに、紺色のスーツを着た 20 代ぐらいの女性が会場に入ってきた。空いている椅子は 5 脚あるから、あと 5 人ほど来ると推測できた。

「あ、中野さんね、こちらにどうぞ」

ゆりの後に入ってきた女性に向けて社長が右手を大きく上下させ、一番手前の椅子を案内している。中野さんと呼ばれた女性は、社長の目をじっと見て「わかった」という風に大きくうなずいた。

新入社員は、女性 7 名だと紹介された。栄養士さんが 2 名、調理補助が 4 名、事務員さ

んが 1 名だった。さっきゆりの後に入ってきた中野さんは、盲学校の高等部を卒業して調理補助として就職したと紹介された。調理補助のうち 1 人の子が、中学を卒業してここに来たと話した。小池さんと呼ばれたその子の耳たぶには、銀色のピアスが光っている。耳たぶに突き刺さっているように見えるワイヤーが、痛そうに見えた。小池さんは黒のパンツスーツを着ているためか、大人っぽく見える。ゆりは中学の時に買ったグレーのワンピースと白のカーディガン姿だ。

社長の挨拶や会社の紹介が一通り済み、バイキング形式の食事が始まった時に、ゆりは小池さんの方へ視線を送った。タイミングよく目が合ったため、微笑んだ後に話しかけてみた。

「私たち、同じ年やんね」

「そうやね、高校は？」

小池さんのゆったりとした声の調子や視線の合わせ方は、ゆりをほっとさせた。

「長田区にある高校に行くよ」

「そっかあ。私は兵庫区の高校やから、違うとこやわ」

同じ 15 歳の女の子だというだけで、身近に感じた。小池さんの行く高校の名前を聞いて、ゆりはどこにあるのかがわかった、神戸にはいくつか定時制高校がある。中学校の先生がそれぞれの高校の特色や場所を教えてくれた時に、神戸の市街地図を開いてみたことがある。家と職場、いくつかの高校の場所に赤マーカーで丸をつけて線で結ぶと、三角形ができた。大きい三角、細長い三角、小さい三角。ゆりは、三角形を見比べた。

「どこがいいか、わからんなあ」

職場や学校を決めるということが大事なことだということはわかる。そんな大事なことを決める時、1 人で決めるのが心細い。誰かに相談したくなる。一番身近な夏子に頼りたい。答えてくれるかどうかはわからないが、独り言のように声を出してみる。

「どうしよう、学校。どの学校にしよう」

じっとパンフレットを見比べていたゆりに、夏子が近づいてきた。

「職場から近いところがいいんと違う？」

「近いところかあ」

ゆりは、三角形の辺の長さを見ながら、地図上で電車の路線を探した。

「この駅からはどうやって行くのかな」

駅からのびる道をよく見てみると、道路上に細く赤い線が引いてあった。バスの路線のようだった。

「バスが走ってそう。帰りの時間までバス、あるのかな……」

また、独り言のようにつぶやく。色々なことがわからない。

高校にはどんな子がいるんだろう。友達になれるのかな。全く想像がつかない。仕事が終わって夜に高校へいく生活を、毎日続けられるのだろうか。

「うん、ここにしようかな」

ゆりは長田区にある商業科の高校に決めた。夏子もそこがいいと言ってくれた。



市バスから降りていったセーラー服姿の女子たちを見てゆりは、この子たちは自分と同じ年ぐらいかなと考えていた。入社式の翌日から仕事が始まり、1週間が経った。着替えやすい服だとか乾きやすい服だと、ついそればかりを着てしまう。今日のゆりはといえば、薄茶色のTシャツに少しゆったり目のジーンズ、白のスニーカー姿だった。そんな私服姿のゆりから見れば、たとえ同じ年だったとしても制服を着ているだけでお姉さんに見えた。

中央卸売市場の看板を目で追うとゆりは、『とまります』と書かれた停車ボタンを押した。

バスを降り、そこから細い路地を抜けると、1階に配達用の軽トラックが10台ほど並んでいる建物が見えてきた。そこで水色のポロシャツを着た男性たちが、トラックの荷台に黄色い番重を積み込んでいる。

ゆりが建物の2階に上がり更衣室に入ると、先に来ていた南さんが言った。南さんは、高校を卒業してからこの会社に就職したと入社式で話していた。

「おはよ。ゆりちゃん、来月誕生日なんやって？」

どこから聞きつけたのかな。ああ、昨日、事務所で栄養士の晴美さんと話している時、南さんがタイムカードを押しに入ってきたからか、とゆりは思った。

「うん。16歳になる」

「若いなあ！ 今、15歳ってことかあ。先月まで中学生やったんやもんなあ……」

「え、南さんも若いよ。私と3歳しか違わへんし」

中卒で就職すると、「若い」なんて言ってもらえるんや。

『吉田』と書かれたロッカーを開け、髪を1つに束ねる。真っ白な帽子には、後ろにネットがついており、そこに束ねた毛が収まる。腰より少し長めの白衣を着て、ふくらはぎの中程まである白い長靴を履く。最後に使い捨てのマスクを着け、表に出ているのは目だけになる。更衣室の時計が8時20分を過ぎたのを確認すると、ゆりは南さんと更衣室を出た。身体に付いた埃を落とすため、強風が吹きつける通路を通る。

「ひゃあっ」

機械が動き出す音とともに、耳、肌、身体に、強い風が当たってくる。南さんが何か言っているが、聞き取ることができない。1畳ほどの空間は、嵐の中だ。左右を見ると風の吹き出す穴がいくつも開いており、黒い吹き出し口はこちらを向いている。30秒ほど嵐の中にいたゆりが通路の出口扉を開けると、それまでとは違う世界が広がった。熱い空気がゆりを包む。そこにある機械の全てが動いているような音をする。大型の調理器具、弁当箱を載せたベルトコンベアー、揚げ物の機械音。手洗い場に着くと、教えてもらった通りのやり方で手を洗う。透明のエプロンをして、薄手のビニール手袋をはめる。

「こうしといたら、ズレへんやろ」

昨日、大橋さんがそう言っていた。手袋が大きくて、指の先でびらびらしていたのを見かねて輪ゴムで手首を留めてくれた。だからゆりは今日もそうしようと、輪ゴムを家から持ってきた。大橋さんはゆりの母と同年代か、それより年上に見えた。こうべ給食で働いている人は、大橋さんぐらいの年代の人が多いように感じた。年金の話をしている先輩もいて、かなり年上の人も働いているようだった。大橋さんはゆりが入った時から、道具の使い方や仕事のスピードを上げるコツを教えてくれる。

ゆりが作業場に下りてきたのを見つけると、片桐さんが叫んだ。

「ゆりちゃん、早く来て！ 今日2つ持ってえ！」

ゆりは、片桐さんの言っている「2つ」の意味がすぐにわかった。10人程の女性が横一列に並び、慌ただしく手を動かし、ベルトコンベアーで流れてくる赤い弁当箱におかずを入れていく。担当するおかずの数は、扱いやすさと担当する人の熟練度によって決められているようだった。コンベアーの流れは速く、弁当箱も次々と流れてくる。瞬きをしている間に、1つ飛ばしたのではないかと心配になる。ゆりは片桐さんの横に行こうと、駆け足で作業場を横切った。作業場で2台あるコンベアーの内、ゆりがいつも担当しているのは奥の方だ。

「ほれ。今日は人が足りんのよ」

ゆりが横に行くと片桐さんは、バランが入っている紙箱と、しば漬けが山盛りに入っている番重を自分の前からゆりの立っている位置にずらした。額にうっすらと汗が光っている。ゆりは片桐さんの手元を見て、そこに2人の人がいるのかと思った。ゆりに2つのおかずを譲っても更に、さつまいもの天ぷらを右手の指の間に3つはさみ、魚の形をした醤油入れを左手にいくつか握っている。「すごいな片桐さん、手が4つもある」ゆりは片桐さんの横顔を見た。

次の瞬間、コンベアーの終わりの方で誰かが叫んだ。

「止めて、止めてえ！」

その声を聞いて、流れる弁当箱の蓋を閉めていた田中さんがコンベアーのスイッチを慌てて押した。

「漬けもんが抜けとうで一、あんたか」

名前は知らないが、顔は見たことのある女性だった。女性はゆりの方を見ながらそう言って前を通り過ぎていった弁当箱を押し返した。それまで少しずつ間隔をあけて並んでいた弁当箱がぶつかり合って押し戻されていくカタカタという音がした。

「すいません……」

ゆりが言い終わらないうちに、片桐さんが笑った。

「よっちゃん、ごめんなあ。新人さんやねん、ちょっと待ったってえ」

『よっちゃん』と呼ばれた女性は表情ひとつ変わらない。

「あんた、バランと漬けもんはまだ無理やろ……」

その声ははっきりと聞こえたが、片桐さんは何も聞こえない様子で、バランを左手に持

った。

「ゆりちゃん、バランはな、左手だけで束で持って、こうして親指でずらして置いていくな

ん。ほんで、右手で漬けもん。あんた器用そうやから、できるやろ。バランの手は手袋いらんで。消毒だけして」

そう言って片桐さんは、ゆりが飛ばした弁当箱に手際よくバランとしば漬けを盛り付けた。

ゆりは、おかずを飛ばしてしまったことよりも、片桐さんが「あんた器用そうやから」「できるやろ」と言ってくれたことに、飛び上がるほど心がはためいた。それに応えるかのようになり、胸の底から突き上げてくる大きな力を感じた。

できる、絶対やってみせる。そう思ってゆりは、バランとしば漬けの扱いに心を燃やした。バランの束を左手で1枚ずらし、右手でしば漬けを1食分つかむ。コンベアーはさっきから止まったままだ。

「もういい？ 動かすで」

田中さんがスイッチに手を置いて、こちらの様子を伺っている。片桐さんが右手を上げるのと同時に、背後から声がした。

「遅れてすみません、漬けもん手伝うわー」

甲高い声が出て、しば漬けの番重がゆりから遠ざかっていった。遅れてきた前野さんの声だった。あまりのスピードに何が起きたのか、わけが分からない。ゆりの手元はバランだけになった。しば漬けの番重は、横に立った前野さんの前にある。そういうことか。ゆりは、さっきまでの気持ちをどこにぶつければ良いのかがわからなくなった。でも、またチャンスは来ると思う。その時のために練習しておこう。ゆりは、手持ち無沙汰になった右手は使わず、左手だけを使った。片桐さんの親指のように、1枚また1枚と、握ったバランをスライドさせる。流れてくる弁当箱の千切りキャベツの上でバランが気持ちよさそうに横たわって流れていった。

「片桐さんってすごいな」

——何でもできる片桐さんみたいになりたい。

ゆりは、次第に片桐さんの動きを観察したり、真似るようになった。動きが速いのは、ずっとこの仕事をしているからなのだろうか。練習をしたら、片桐さんみたいになれるのだろうか。夏子よりうんと年上に見える片桐さんは「お母さん」という感じではないけれど、とにかく片桐さんのようになりたい。

「ゆりちゃん、帰り際に悪い。これ頼んでええか」

片桐さんに呼ばれると、好きな人に呼ばれた時のような気持ちになった。緑色の床や、銀色の調理器具だけで囲まれた作業場に、光が差し込んでくる。身体が喜んでる音が聞こえてきそうだった。片桐さんに用事を頼んでもらえるなら、無理そうなことでもなんでも引き受けるつもりでいた。紙パック入りのコーヒー牛乳を、発注された数だけセットす

る仕事、うどんの玉を、発泡スチロール製のお椀の中にセットし、かまぼこやとろろ昆布を上を盛り付けていく仕事など、毎日少しずつ、頼まれる仕事が増えていった。うどんをセットしたお椀には業務用のラップをかける。プラスチック製のラップホルダーには、家庭用の四倍ほどありそうなラップのロールが入っていた。ホルダーから両手の親指と人差し指を使ってラップを引き出す。それをお椀の上をかけ、右手の指先から肘で刃にあてたラップを押さえて切る。

「あー、またや」

ゆりは、端にしわが寄ってくっついたラップを両手で丸めた。

「ゆりちゃん、苦戦しとうなあ。こうやで」

横から大橋さんの手が伸びてきた。ラップは大橋さんの手元でピンと伸び、お椀の上に被さった。お椀の中で、うどんの麺が満足そうに鎮座している。

「これ……持って帰ってもいいですか？ 明日また持ってきます」

思うようにできないことが悔しい。

「いいけど……こんな重たいもん、持って帰るんか？」

そう言っていた大橋さんは、帰り際にラップの器具を紙袋に入れてくれた。

「今日から学校、あるんやろ？ 重うないか？」

「バスやし、大丈夫です」

「そうかあ。あ、これも持って行き」

大橋さんは6段積み上がった番重の最上段に入っているから揚げを指さした。

「あんた、お腹すくやろ。今日のおかずの残りやけど、捨ててしまうからもったいないし」

そう言って、盛り付けの時に使う使い捨ての手袋を1組取り出し、その中から揚げをぎゅっと詰め込んで、輪ゴムで口を留めた。

「袋ないからな」

はははっと笑う大橋さんの手から受け取った手袋の先が、タコの足みたいに揺れた。

「さ、はよ帰ろうで」

ゆりは、野菜場にいる小池さんと上がろうと思って、野菜場へ行った。

「ほら、あんた、ちょっと。そこにおったら、じゃまになるわ」

端によけたゆりが「すみません」と言うのも聞こえていない様子で、キャベツの箱を抱えたその女性は、野菜場の奥へ入っていった。野菜場にある作業台の上には、ゆりの家にあるものの10倍ほどはあるだろうと思われる大きなまな板、ざく切りにしたニンジンをつぱいに入れたプラスチック製のカゴが載っている。その横に、そのカゴを三段重ねにして載せた台車がある。3段になると、カゴの一番上はゆりの背丈ほどであった。

「あんた、なんていうの、名前」

さっきの女性が台車を押しながら近づいてきて訊いた。

「吉田です」

「いや、下の名前は？」



「ゆりです」

「ゆりちゃんか。雅子ちゃーん、ゆりちゃんが来とうで。もう四時やで帰り」

小池さんは、奥の壁から顔をのぞかせた。

「片付けるまで、ちょっと待ってな」

奥にある冷蔵庫のドアが横にスライドする音がした。しばらくすると、もう一度同じ音がして、小池さんが駆けてきた。

「さあ、帰るかあ」

終わった。急に足が重くなった気がした。

そうや。今日はこれで終わりじゃない。今日は高校の入学式やった。ゆりは、吐き出しかけた息をまた飲み込んだ。喉の奥が、きゅっと引き締まったように感じた。

バス停までの道には、小池さんとゆりのはしゃぎ声が響いた。ゆりとは違う高校だが、小池さんもこの4月から定時制高校に通う。でも入学式は明日なんだと話した。

「私、美容院の予約するわ。今日、予約が空いてたらいいんやけどなあ」

小池さんは携帯を耳に当てながら、財布から雑誌の切り抜きのようなものを取り出した。ショートヘアのモデルさんの写真だ。美容院は電話で予約をするんや。ゆりはそれを初めて知ったが、言わなかった。

小池さんが電話を終えたところで、ちょうど横断歩道にさしかかった。

「小池さん、今日は私、あっちのバス停に行くね」

ゆりは、大きな道路を挟んだ向こう側を指さした。

「あ、今日、入学式やったね。そっか、あっちのバス停からなんや。そのワンピース、似合ってる」

小池さんの大きな瞳が、向こうの車線やゆりの服へと忙しく動いた。

「きちっとしたのが、これしかないねん」

入社式の時に着ていた服と同じ服だと言いかけたが、きっと小池さんはわかっているだろうと思って、言うのをやめた。

ゆりは横断歩道まで来ると、小池さんに手を振り、いつもと反対側のバス停へ向かった。バスに乗って30分。バスを降りてからまた歩く。学校が見えてきて上り坂にさしかかると、制服姿の学生が4、5人、向こうから歩いてきた。坂を上りきったところで『入学式』と書かれた立て看板が見えてきた時に、「入学」なんだと改めて感じた。4月1日に入社してから今日までの1週間ほどは、仕事だけをしてきた。だから高校生になることを忘れかけていたような気がした。看板の横では金髪の女性と茶髪の女性が立ち話をしている。そのうちの1人と目が合った。すれ違う時、腕に力が入る。入学する人なのか、先輩なのか、よくわからない。学校はどんな雰囲気なんだろう。心臓が胸の奥で大きく揺れだした。新入生は5時半に教室へ集合するよう書いてある張り紙が目に入ってきた。ゆりが時計を見ると5時になったところだ。集合時間まで30分もある。ちょっと学校の中をまわってみよう。

講堂までの渡り廊下を歩いていると、金管楽器の音が響いてきた。何の楽器なんだろう。

トランペットかな。窓の外を見ると、制服を着た高校生が金色の楽器を吹いている姿が見える。

「昼間の学生も一緒に校舎を使ってるからねえ。賑やかでしょう」

声のした方を振り向くと、50代ぐらいの女性が微笑みながらゆりと同じ方向を見ていた。外は次第に暗くなりかけている。視点を外から窓ガラスに映る自分たちに移すと、ゆりと並ぶその女性の輪郭がくっきりと見えた。

「私は事務員の中林です。新入生？ 何かわからないことがあったら、いつでも1階の事務所に来てくれたらいいよ」

「あ、新入生の吉田です」

中林さんの眼鏡の奥で、2つの優しくそうな瞳が微笑んでいた。

中林さん——。いつでも行っていいんや。ゆりは、心の中で繰り返した。

講堂にはパイプ椅子が並べられ、しんと静まり返っていた。先生と思われる人たちがマイクの音声チェックをしている声が聞こえてきた。

もうすぐ5時半。ゆりは教室の案内図を見て『新入生集合場所』と書かれた教室へ向かった。しばらくすると、自分と同じぐらいの年齢の子、スーツを着た大人の人、白髪まじりの男性や女性が次々と教室に入ってきた。顔を合わせても、まだ誰もしゃべらない。

講堂での入学式を済ませ、教室に戻ってきても、誰もまだしゃべり出さなかった。ゆりの高校は本科と呼ばれる高校コースと、高校を卒業してから社会人になり、経理を勉強したい人のための専科コースに分かれていた。さっきの入学式の時に見てみたところ、高校コース、専科コースの1年生は一クラスずつだった。2年生から4年生も1クラスで、1年生より人数が少なく、10人に満たないように見えた。さっきゆりが校門を通るときに会った金髪と茶髪の女性は、2年生のようだった。しんと固くなった雰囲気の中で、先生は震災の話をした。震災が起きてから1年間の間に先生、先輩、この学校が経験したことが次々と話された。ゆりの知らなかったことがたくさんあった。先輩やその家族、友人、同じ会社の人の中にも被災して今も大変な状況の人がいること、高校が避難所になっていたこと——。厳しい状況の中でも力を合わせて進んでいこうと、話は締めくくられた。

教室で先生の話が終わり、自己紹介も簡単に済ませた。帰りの挨拶をした後で、ゆりの前の席に座っている子が振り返って微笑んだ。

「私、泉こずえ。よろしくね。さっき自己紹介したけど、もう1回するわ」

そう言って、黒く長い前髪をひらひらと揺らした。

「吉田ゆりです。よろしくね。仕事は？ 何してるの？」

「車の部品をつくる工場で働いてる。吉田……さんは？」

「ゆりでいいよ。私は給食弁当の会社で働いてるよ。毎日、コンベアーに乗って流れてくる弁当箱におかずをひたすら詰めていくのに必死」

ゆりはそう言って笑いながら、両手でおかずを取っては弁当箱に詰めるまねをした。

「そうなんやあ。私もこずえって呼んでね。私もゆりちゃんと一緒、一緒。部品の名前と

形を覚えるのに必死」

こずえはそう言って顔の前に垂れ下がってきた前髪をかき上げた。ゆりは、こずえとすぐに仲良くなれそうな気がした。自分と同じように仕事と学校を両立させようとしている仲間がいる。まだ話したことのない同級生も、きっと慣れない仕事を必死で覚えようと頑張っているんじゃないだろうか。それは自分と同じかもしれない。仕事を終え、学校に来て、勉強をして「また明日」と言って帰る。これからそんな毎日が続いていくんだ。

ゆりが家の前に帰り着くと、まず玄関のガラス戸から漏れる光を確認した。夏子の部屋の辺りは真っ暗だった。仕事が始まってから、夏子の調子に変化があるかもしれないという心配もあったが、今のところ大丈夫そうだった。毎日、作業所に通うこともできているようで、そのことで日中の気がかりはなくなった。ドアの鍵穴に鍵をさし、右にひねる。昨日ゆりが夏子に頼んでおいた通り、外灯を点けておいてくれている。これが点いていないと何も見えなくて、鍵穴を探すのに一苦労するところだった。

台所の時計を見ると、もうすぐで9時10分になるところだった。夏子の部屋を覗いたが、寝ているようだった。寝る前にはいつも睡眠薬を飲んでいるはずだから、一度寝てしまうと、声をかけても起きないことが多い。きっと、ゆりが帰ってきて物音を立てても気づかないだろう。今日は入学式だったから早く帰ってきたけれど、明日から授業が始まる。帰るころには10時過ぎになっているはずだ。

テーブルを見ると、ラップをかけたおかずが用意されていた。ゆりはラップの上から手をあてて、料理をしている夏子の姿を思い浮かべた。胸のあたりがじんわりと温かくなった。1日が終わったと思うと手足が重くなり、眠気が襲ってくる。でもまだ仕事はある。職場から持ち帰ったラップの器具を使って練習をしたい。ゆりはしばらく台所のテーブルに突っ伏した。朝の7時ごろに家を出て、今、帰ってきた。長いような、あつという間のような1日だった。

翌朝、起きて台所に行くと、テーブル上のお皿に黄色い玉子焼きのようなものが盛り付けられていた。その上にはケチャップで円が描かれている。

「スクランブルエッグ」

お皿を見つめて立っているゆりに向かって、夏子が言った。

「あ……うん」

朝は出勤前で慌ただしく、簡単に準備できる食パンと牛乳を朝ごはんにするのが日課だったから、ゆりは少し戸惑った。食パンと牛乳と、スクランブルエッグ。祖母が亡くなる前、玉子を使った料理の中でスクランブルエッグが一番簡単にできると言っていた。四角い玉子焼きを作る時に巻くのを失敗してしまっても、オムレツがうまくまとまらなくても、そこから形を崩してスクランブルエッグにしてしまうことだってできる。

ゆりは時計に目をやると、慌てて手を合わせた。7時2分発の電車に乗りたい。ゆっくりと味わっている時間はない。食パンと牛乳は急いで流し込んだが、スクランブルエッグは

大切に味わいたいような気がして後回しにした。向かいあって食事をしている夏子との会話は無い。ただ黙って、食べ物を口に運んでは少し噛んで、飲みこんでの繰り返し。食事の時に何も話さない家族って、変わっているのだろうか。そう思うと、ゆりの胸に寂しい気持ちが湧いてきた。中学生の時に、友達のエリンさんの家で一緒に食事をさせてもらったことがあった。たしか、あの時はエリンさんのお父さんやお母さんが学校のことを訊いたり、アイドルの話で盛り上がりしていたなあ。でも……とゆりは思った。スクランブルエッグを見ているうちに、会話がなくてもいいやと思い始めた。簡単にできる料理ではあるけれど、これを作るために準備をしたんだろ。作ろうと思えることがすごいことだし、それで十分だと思った。夏子を見ると、うつむいたまま口を動かしている。食事中に何も話さない人もいるんだろ。話したくないなら、無理に話す必要はない。怒っているわけでもないし、気まずいわけでもない。そうやって食事をするのがお母ちゃんなんや。周りから見ると変わったお嬢なのかもしれない。でも、それでいい。

ゆりの口の中で、まだほんのり温かい玉子の香りが広がった。

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。